

報告

＜「やさしい日本語」でつながるコミュニケーション・シート＞の普及と増補

The Spreading and Enlargement of “Communication Picture Sheets for Yasashii-Nihongo”

国際言語文化アカデミア外国籍県民等支援事業担当部会¹

Foreign Residents Support Group of ILCS

0. はじめに

平成 27(2015)²年度から開始された「地域日本語教室向けビギナー教材開発」プロジェクトは、当初、日本語入門期学習者のために地域の日本語教室で扱いやすい教材をつくることを目的としていた。しかし、その開発半ばで、試作品が日本語学習以外の場でも活用できそうなことに気づき、「やさしい日本語」を使ってコミュニケーションを図る際の補助ツールとしても有効な、イラスト主体のシートを開発することへとシフトしていった。自治体国際化協会の助成を受けて開発・研究し、その後に完成したイラストシートは、＜「やさしい日本語」でつながるコミュニケーション・シート＞の名で、平成 30 年 10 月に国際言語文化アカデミアのホームページにアップされた。ダウンロード可能な形でインターネット上にアップしたことを普及への第一歩として、それ以外にもコミュニケーション・シート普及のために行ったいくつかの試みを以下に紹介したい。そして、その後に令和元(2019)年度での増補について言及する。

1. ソーシャル・メディアを利用した普及促進

従来、自治体や NPO が提供する新しい教材などの広報は、公開当時の刊行物への掲載記事をのぞくと、その後のイベント時におけるチラシ配布程度にとどまることが多かった。しかし、それだけでは利用する人が実際に手に取るまで導くことは難しい。しかも、アカデミアの例では、チラシ配布は自治体等を経由する場合が多く、本当に必要とする人の目にとまっているのかという心配が常に伴った。その上、チラシで存在を知っても、そこから実際に手に取るまでには、チラシを見ながらコンピューターに URL を入力したり、適当な語で検索をかけたりする手間がかかった。それに比べ、メーリング・リスト(以下 ML)やソーシャル・ネットワーキング・サービス(以下 SNS)での紹介ならば、記載された URL をクリックするだけで、すぐに当該サイトに到達できる。この利便性を、e-mail での連絡が普通となった現在の環境で生かさないという選択はない。コミュニケーション・シート開発の過程でご協力をいただいた、外国人への対応が求められる職務のかたがたやボランティアのかたがたとも連絡は e-mail が基本である。ご協力いただいたボランティアの背後にはそれぞれの日本語教室があるので、仲間のボランティアに情報や教材が届けられることははっきりしている。そのため広報は主として SNS や ML 等のソーシャル・メディアを利用することにした。

＜「やさしい日本語」でつながるコミュニケーション・シート＞の正式な完成の通知は、平成 30 年 11 月 8

日に e-mail でご協力いただいたボランティアや関係者に送った。次いで 11 月 20 日に、かながわ国際交流財団主催の「かながわ多文化共生メーリングリスト」、および横浜市国際交流協会主催の「横浜国際交流メーリングリスト」に投稿し、<「やさしい日本語」でつながるコミュニケーション・シート>が公開され、無料ダウンロードができることを、日本語教育や多文化共生に関心のある県民のみなさんに伝えた。また 11 月 28 日に SNS (Facebook) 上の「かながわ国際・多文化ソーシャルワーク研究会」のページに教員個人からの投稿を行うとともに、アカデミア教員のつながりを通し、全国各地の日本語教師や外国人³への支援に関わる人々に本シートを紹介していった。

そうしたことの効果か、11 月 28 日には Facebook 上で、国際交流に携わる東北のかたによる紹介があり、同じく 12 月 3 日には、「NPO 多文化共生リソースセンター東海」に取り上げられた。この団体は当時でも 2500 人以上のフォロワーを持つ、愛知県の NPO である。まもなくそこから 5 件のシェアが確認できた。Twitter でも同時期に 3 件のツイートがあり、いずれも国際交流団体、および日本語教育関係者によるものと思われた。以上が公開して間もないころの反応である。

そして、アップロードをしてから約 1 年経とうかという頃、国際日本語普及協会 (AJALT) 発行で、全国に読者を持つメーリング・マガジン『こだま』で紹介してほしいとの依頼を受け、同 366 号 (令和元年 9 月 12 日配信) に記事を執筆することができた。地域の日本語教室で「コミュニケーション・シート」を使用した同会所属の日本語教師による提案だったと聞いている。ほどなく都内の「江戸川・多文化共生ニュース」(9 月 12 日 Facebook 個人ページ)での紹介、また Twitter でも 9 月 15 日付での 2 件のツイートが確認できた。ともに日本語教育関係者のものと思われる。うち 1 件では「外国人児童生徒日本語支援お役立ちサイト(教材関係のまとめ)」とする 30 点のうちの 1 点として、コミュニケーション・シートが取り上げられ、「来日してすぐの外国人児童や生活者の方にぴったりです。絵も豊富でわかりやすいです」とコメントが添えられた。シートを使用しての感想と思われるが、使い手の調整ひとつで、成人に限らず、年少者対象の実践にも活用できたことがわかり、作成したわたしたちの期待通りに使用場面が広がった例といえよう。

また、これまでとは別のかたによる令和 2 年 2 月 14 日付けのツイートでもダウンロードのサイトが紹介されており、シートが各地で利用されていることがわかる。

ちなみに、このダウンロード元となるアカデミアのウェブサイトの閲覧状況を見てみると、公開した平成 30 年度は 2019 ビュー (10 月公開、4 カ月分)、令和元年度の 12 カ月では 4317 ビューである。この数字がそのままダウンロード数になるわけではないが、平均すれば一カ月あたり 396 ビューを獲得していることがわかる。令和元年度においては、最多が上掲『こだま』で紹介された 9 月の 680 ビュー、最少が 1 月の 275 ビューである。

このサイトには、帰国・外国人児童生徒教育のための情報検索サイト「かすたねっと」(文部科学省)、および日本語コンテンツ共有システム「NEWS」(文化庁)からもリンクが張られており、全国の日本語ボランティアが容易にアクセスできる仕組みとなっている。

以上のように、普及のためには主としてインターネットを利用したが、同時に、日本語ボランティアをはじめ、外国人とのコミュニケーションが必要なかたがたの受講する各種講座、および公務員対象研修など、利用の可能性があるかたと対面できる機会には、従来同様チラシを配布した。また、アカデミアの月

刊広報紙(令和元年6月号、同年8月号)においても一部のシートを縮小掲載して紹介に努めた。

2. 講座での紹介

インターネットおよび紙媒体による広報での周知は重要だが、それ以上にコミュニケーション・シートの現場での活用につなげる試みが、本シートの普及はもちろん、日本語教室での活動の質的向上のために、一層重要なことである。そして、それこそボランティアのための講座をこれまで重ねてきたアカデミアならではの強みが発揮できる部分でもある。令和元年度には「日本語ボランティアのためのコミュニケーション・シート」講座を新設して、日本語教室での活用法を紹介することにした。＜「やさしい日本語」でつながるコミュニケーション・シート＞は5つのユニットに分かれているので、それぞれのユニットごとに1回の講座を充当した。そのため4月から12月にわたる計5回の講座となったが、各講座は独立させ、曜日や時間も適宜変え、不定期に実施し、あえて連続しての受講は求めなかった。限られた人の完全な受講より、多くの人にコミュニケーション・シートについて知っていただきたいからである。

各回の内容は、それぞれ当該ユニットのコミュニケーション・シートと補助カードを合わせての具体的な活用例を講師が紹介し、その後、ワークショップによる受講者側からの活用法の提案とその検討、共有、そして質問対応等を行った。コンピューターの操作に慣れていない方のために、毎回ダウンロードの手順書を配布し、それに沿った説明も必要に応じて追加した。

わたしたちはコミュニケーション・シートを、語彙や文型の指導等を目的として作成された従来の絵教材とは区別して伝えたいという思いを持っている。「教材」として活用することも可能だが、「教材」ではなく、相互理解に至る対話を促進するための補助ツールとすることを意図して開発した。したがって、どの回の講座においても担当講師は、「これはこう使うものです」と決まった使いかたを教えるのではなく、あくまでも例として「こんな使い方はいかがですか」「こう使ったらどんな話ができるでしょうね」と、受講者の自由な発想を促す形で展開した。ただし、単語の列挙に直行しかねないシート(一例が「ユニット5 趣味」)の場合は、「個々の単語学習のためのものではありませんし、それはやめてください」と注意喚起をした。つまり、「日本語ボランティアのためのコミュニケーション・シート」講座では、シートは単語を教えるためのものではなく、コミュニケーションを目的としたツールであることを徹底して伝えたのである。講座の実施記録を〔表1〕に掲げておく。

〔表1〕に見られる43名の受講者の中には、3回受講されたかたが5名、2回のかたが3名含まれるため、受講者実数は30名になる。講座日程は、そのつど月刊の広報で発表するので、複数回の受講が初回から予定されていたとは考えにくい。そんな中で複数回受講されたかたが3分の1近かったということは、シートを活用してそれぞれの必要や関心に合わせて自由に展開していくアイディアの出し合いというような部分が、講師の話以上に、刺激的で興味をひいたのではないだろうか。

「ユニット3 わたしと町」の受講者が突出して多いのは、このユニットの講座を掲載した広報紙に、シートがイラスト付きで紹介されたことの影響もあろう。しかし、複数回の受講者たちが、1名を除き全員この回を受講していることから、住んでいる町という地域そのものを取り上げる活動に関心が集まったと考えられる。地域の日本語教室で活動するボランティアの思いに応えるユニットなのではないだろうか。

〔表1〕 令和元年度「日本語ボランティアのためのコミュニケーション・シート」講座 講座実績

開催 月日	ユニット	内容	担当教員	受講者数	アンケート 回収数
4/22	1	自己紹介	村上	7	6
5/22	2	わたしのことば	坂内	7	7
7/19	3	わたしと町	小島	17	15
9/30	4	わたしの一日	村上	5	4
12/16	5	わたしのこと	村上	7	7
				合計 43	合計 39

講座受講者にはアンケートを取った。質問のうち「期待した成果が得られましたか」という問いに対しては、35名が期待した成果が得られた旨の回答で、うち17名は期待以上と答えている。講師は受講者に対して彼らが求めているものを、高い水準で提供できたといえよう。

「今後活かせるものが得られましたか」という問いには、38名が得られたと答え、うち過半数以上の23名が十分得られたと答えている。今後、教室でシートが活用されることを期待してもよいだろう。

「意識や行動は今後変わりますか」と受講後の意識行動の変容を問うた際も、37名が変わると答え、うち8名は大いに変わると答えている。これらの回答は、コミュニケーション・シートがこれまで使われてきた教材と一線を画していることへの気づきの現れだと理解できる。その結果、今後、日本語ボランティア活動に取り組む姿勢に変化がもたらされれば、講座という形でコミュニケーション・シートを紹介した目的は十分に果たされる。

以上のようなことから、令和元年度に実施した「日本語ボランティアのためのコミュニケーション・シート」講座が、すでに決まっている使い方の伝授と習得ではなく、使用者が独自にシートの使い方を考え、それぞれの活動の場や相手に合わせて工夫やアレンジを加えた活用への取り組み方を伝える講座になったことが窺える。それと同時に、シートがボランティアの現場に受け入れられるための実践講座という役割をも果たしたといえる。コミュニケーション・シートの活用でボランティアと学習者の対話が促進され、地域の日本語教室が、日本語の指導だけの場から相互理解を促進する場となるために、少しずつでも変わっていくきっかけになることを願わないではいけない。それぞれの地域の教室で、また「アカデミア日本語くらぶ」などの場で、今後もボランティアを中心にシート活用事例の紹介と共有が行われることを大いに期待したい。

3. 令和元年増補 — 災害をテーマに

(1) テーマの選定

コミュニケーション・シートは当初から増補することを想定して作成していた。日本語を母語としない人と一緒に語り合うべき生活上のことがらは無限と言っていいほど多く、その優先順位はその時々必要に迫られることが圧倒的である。そのためコミュニケーション・シートはこれで完結という形には敢えてしていない。平成 30 年度には地域生活に必要な日常的な場面を選んで作成したが、そこに含まれなかった災害対応という生活上の大きな課題が無視されていたわけではない。アカデミアが県立機関であることを思えば、すべての県民の生活の安全を守ることへの貢献は責務でもある。

このコミュニケーション・シートを公開する直前の平成 30 年7月に豪雨⁴が西日本に甚大な被害をもたらした。外国人を含む多くの住民のかたが被災した。その際、東広島市教育文化振興事業団で外国人支援に携わっている「コミュニケーション・コーナー」⁵の人々が、発災前後から復旧までの間、ほぼリアルタイムで Facebook を利用して地域の外国人に情報を提供していた。本稿では伝達の詳細に立ち入らないが、日ごろから日本語教室で培われた信頼関係を土台にして支援情報が逐一伝えられ、伝達方法にも内容にも目を見張らされた。しかしその一方で、「やさしい日本語」や多言語を用いた水害時のやりとりを追いながら、理解の土台となる水害に関する知識や常識がなければ、せっかく情報が伝えられても、それをタイムリーに正しく受け止めるのは決して簡単ではないということにも気づかされた。このような非日常的なことがらについての知識・常識は平和な日常生活の中では獲得するのが困難なものである。単語として覚えても、それだけでは適切な行動に結びつきにくいのではないか。そこで緊急時ではなく、平時にこそ災害に備えるための対話を可能にする環境が必要だと考え、その環境を作り出すために、令和元年度のコミュニケーション・シートで扱うテーマを災害に決めた。完成した2枚の本シートは本稿末尾に縮小掲載してあるので、適宜ご覧いただきたい。加えて250枚を越す補助カードが用意されている。

(2)なぜ水害か

自然災害には、暴風、豪雨、豪雪、洪水、高潮、地震、津波をはじめとして、その他の異常な自然現象によるものが数えられ、地域性も大きい。そのなかで歴史的に度重なる地震の被害を受けてきた日本では、住民に対し、地震の際に身を守るためのさまざまな情報提供がなされ、外国人住民に向けた多言語化されたパンフレット⁶なども作られ、地域日本語教育の場でもしばしば取り上げられるテーマともなった。アカデミアでも平成 25 年に『つながるにほんご—かながわでとものにくらす』を刊行した際、ユニット5「防災」において、日本が地震国であることを取り上げ、身の回りの危険箇所、初期対応の知識、避難や助け合いなどを地震に関連させて扱った。

しかし、一方で、地震を話題に防災の考え方や備えについて、理解を深めることはなかなか難しく、話し合いもあまり盛り上がらないという声がある。地震災害の恐ろしさをよく知らない外国人にとっては、それを身近な危険として認識できるだけの生活経験などが不足している場合など、到底わがこととして受け止めにくいのだと考えられる。そこで、わたしたちは、自分たちが暮らす地域や日常生活の安全に直結できる話題が必要であると考え、荒天が引き起こす水害に着目した。ちなみに中小企業庁の調査⁷では我が国における自然災害による被害の内訳を見ると、発生件数は「台風」が 57.1%と最も多く、次

いで「地震」、「洪水」が多いとされ、(財)国土技術研究センターによれば、実に98%の市町村で水害・土砂災害が発生⁸しているという。つまり、現在の日本において、水害は遭遇する可能性が極めて高い日常と隣り合わせの災害の一つであるといえるだろう。そこで、多文化共生を視点とする防災資料に目を向けると、地震のことは、これまで各地で作成されたものがかなり蓄積されているのだが、水害が独立して取り上げられることは少なく、防災のパンフレット等でも、水害のために割かれる紙面は地震に比べわずかであることがわかった。そのため、地域住民どうして日々の生活の中にある危険や防災について話すきっかけとなるような素材の提供として水害が最適だと考え、それを取り上げることにしたのである。

次に、予知が極めて困難な地震に比べ、水害の引き金となる気象災害は、事前におおよそ予知することができて、発災までに多少の時間的猶予が与えられる上、地域ごとの被害もハザードマップ等である程度シュミレーション済みだということだ。こうしたことから、水害は予備知識があることで安全を確保しやすい災害だといえるだろう。言い換えれば、身の安全を確保するために予備知識の果たす役割が大きいということになる。温暖化の影響か、近年は大雨に起因する水害が多発し、外国人も巻き込まれる例が少なくない。先に上げた平成30年7月豪雨以前でも、平成27年9月の関東東北豪雨⁹で鬼怒川堤防が決壊し、常総市を中心に多くの外国人被災者が出た。そしてまだ記憶に新しいところでは令和元年10月の東日本台風(台風19号)¹⁰がもたらした大雨による被害がある。このところ大雨には毎年のように見舞われる¹¹。しかし、大雨等の気象災害は一定の予知が可能で、被害にも地域特性が反映されるからこそ、地域の仲間で話し合っただけで万が一に備えていることが安全に直結する。

さらに付け加えるなら、地震のない国はあっても、水害のない国は極めてまれだということだ。砂漠であっても水害は起きている。海外での水害は、日本の水害とは発生のしくみが異なったり、その後の復旧のありかたや政府の対応等が多様であったりするという違いはあるが、大量の水によって日常的な生活が打撃を受けるという点においては変わりがない。とすれば、水害にどう対処するかという知恵は、外国人住民もそれまでの経験を通して獲得していることが想像できる。地震の場合は、地震をよく経験している側からまったく経験のない側へと、ある程度一方的に情報提供をせざるを得ないが、水害なら、それぞれの経験をもとに話し合うことが可能ではないか。対話における双方向性を担保できる話題として、水害は要件に適っている。これが三つめの理由である。

災害は人を選ばない。しかし、被害はそうではない。日本での生活歴が浅く、日本語に不自由を覚える外国人の場合、日本での生活における知識や常識等の不足から、避けられることを避けそこねて、より深刻な被害を受ける可能性が高い。もとより災害は水害に限定されるわけではないが、わたしたちは上記のような理由から、令和元年度は「水害」を優先的に取り上げることにした。ただし、「水害」という言葉は、外国人になじみが薄いため、シート作成にあたっては、水害を招く気象であり、日常的に耳なれた言葉という点から、「大雨」という名称を用いて、より活発な意見交換が容易になるようにした。

(2) どんなシートにするか — イラストに求めるもの

<「やさしい日本語」でつながるコミュニケーション・シート>の主眼は、あくまでも対話を促すための補助ツールとしての活用である。何かを教え込むための絵ではない。伝えたいことを持つ話し手と、それを

受け止める聞き手との間に存在する日本語のギャップを軽減するためのイラストである。自然に対話がはずむような絵柄が好ましいことは言うまでもない。

また、これまでの外国人向けの災害時対応のパンフレット等は「知識のある人から知識のない人へ」に向けて一方的に教える姿勢で作られていることが多い。地域の外国人の自発的な気づきを待たず、問題意識の希薄なところに情報だけを与えても、それが「わがこと」として身につく可能性は低いと思われる。ましてや上から目線の指導では理解以前に拒まれても仕方がない。

わたしたちは、どんなことがこのコミュニケーション・シートに求められるかを何度も話し合った。日本語能力のギャップを埋められること、おのずと気づきを生むこと、そこから「やさしい日本語」で運ばれるやりとりによって、災害時の安全についてより深く関心が持てること、何より他人事でなく「わがこと」として考えられること、シートにはこうした条件を満たすイラストが求められる。その点で、大雨や水害にまつわるさまざまな現象を羅列して網羅するものは、一方的な「説明」になりかねないため、早々に除外された。

一目見ただけで、自分の経験や知識から、何かしら話ができるようなものが、「わがこと」のイラストである。機械的な羅列ではなく、大雨による水害の様子が緩急をつけて盛られていなくてはならない。すぐに気づけること、よく見れば気づくこと、絶対に起きること、時と場合によること、「わたし」も日頃注意していること、「わたし」にできること、「わたし」が知らないこと、お年寄りが困ること、赤ちゃんが困ること等々、地域で暮らすいろいろな人のいろいろな課題が討議の俎上に上る必要がある。そのため、テーマ直結の本シートは大雨と水害を俯瞰するイラストでなくてはならないという結論に至った。

さらに、母国での経験を活かしたり、災害がおさまってからの人々の行動を知ったり、助け合いの可能性を自ずと意識できたりするために、発災時だけでなく、救助や復旧の様子も必要だということになった。結局、同じ場所で、大雨で水害が発生したときと、雨が上がって復旧が始まったときとの2種類のシート、つまり、ビフォー・アフターの二つの場面を本シートとして提供することにした。発災前、発災中、復旧中の3枚に仕立てるという意見もあったが、発災前の平時を描くシートがあることで、前段階の説明が必要以上に長引く恐れがあるため、最終的には発災時と復旧時を描く2枚の本シートに落ち着いた。そして、それぞれ「大雨一命を守る」、「大雨一暮らしを取り戻す」と名付けた。

これまでフリー素材を使ってシートを構成してきたわたしたちにとって、同じ場面を状況によって描き分けて2枚のシートを作るということは大きな壁であった。そもそもフリー素材は個別のアイテムが主で、大きな風景のような場面を取り上げたものは皆無に近い。たとえば大都会と田舎というように風景を対比するイラストはあるかもしれないが、同一の場所で水害発生をもとに、その前後を描きわけたものなどフリー素材に存在するとは思えなかった。自作するにしても、素人の手には余る。かくして頓挫しかけたところで、イラストレーターのたかえみちこ氏に作画の依頼をすることが可能になった。

イラストレーターが確保できたことで、引き続き画面を構成する場面の検討に入った。そのために災害の前後を扱った先行事例を調査し、県内外の災害の記録や報道記事を渉猟し、それぞれがこのシートに必要な記事などを持ち寄って討議した。報道写真や国土交通省等が提供するイラストも、各自が考えていることを確実に伝えあうために必要であった。水害は地形と深く関わる。シートの画面に必要な場面を入れるためには、その事象の発生が理に適うだけの地形の設定も求められる。大きな画面に切り抜いた絵や写真、あるいはメモを並べながら、舞台となる地形を想定し、さらに細かい仕様を詰めて

いった。俯瞰の範囲が広すぎでは個々の事象が見にくくなり、狭すぎでは扱える事象の件数が限られる。しかも個人の注意を喚起するためには、時に拡大して細部までいれなければならない。さらにどこにもありそうな、珍しくない地形にすることも、「わがこと」にするためには重要なことだった。

この過程を経たことは、11月に入ってイラストレーターのたかえ氏と細部の打ち合わせをする際にも奏功した。完成した下絵があったわけではないが、「川のこちら側は氾濫しても、対岸ではまだ避難が可能なように描いてほしい」「ここには土のうがほしい」「この人には杖がわりのもを持たせてほしい」など、たかえ氏には子細にわたり、わたしたちの要求を伝え、それを理解していただいた。そして、それ以上にさまざまな要素を画面に盛り込んで、大変情報密度の高いイラストに仕上げていただいた。しかも、大雨による水害という深刻な場面を描きながら、親しみやすい絵柄での仕上がりとなっている。諸事情から白黒グラデーションとなったが、実際にダウンロードして使われる日本語教室等の現場では、白黒コピーで全員に共有されるようになることが多いだろうから、結果的にはこれでよかったと考えている。

こうして本シートは専門家に任せつつ、わたしたちは、大雨や水害の話をする時に必ず話したくなるような話題を想像しながら、補助カードの作成にあたった。こまごまと補助カードがあれば、今暮らす地域の生活に慣れていない人たちからも、それまで暮らした別の地域での経験や力が引き出しやすくなるだろう。年度末に、たかえ氏から完成した本シート2枚が届けられたことで、補助カード作成には一層拍車がかかった。企画したわたしたちですら、発災時やその後を描くシートがあることで、どれだけ新たに思いつくことがあるか、改めてイラストの持つ力を見直した。また、こうした特殊な分野においても多様なアイテムをフリーイラストとして提供されているイラストレーター諸氏の働きにも大いに助けられた。

(3) 活用への期待

今回作成した災害をテーマとするシートも、ダウンロード可能な状態で公開されることが決定しており、本稿執筆の時点で最終調整に入っている。現時点で、使ってくださる人々への期待を述べるのも早急に過ぎるが、シートを見ながら、在住地域の地形を思い出して、大雨が降った場合の安全に思いを馳せていただければと思う。「こんなことが起きるかもしれない、どうしよう？」という思いを、これまでにその地域の災害を経験したり見聞きしてきたりした人と、まだあまりその地域に慣れていない人¹²とが共有しつつ、「いつ避難をするか」、「何を用意するか」、「あなたならどこを通るか」、「ご近所に体の不自由なかがいらっしゃるか」、「あなたの国ではどうしていたか」など、一方的な説明ではなく、実情に応じた話しあいの形で使用してほしい。2枚の本シートと250枚以上の補助カードのほかにも、過去の水害時の写真や各自自治体のハザードマップなどがあれば、対話が促進されるだろう。コミュニケーション・シートやこれらの資料は情報提供をする際にも役に立つが、むしろ他者の経験を引き出すことを意識した使い方をするほうが、より深い理解やつながりを生むきっかけになると考える。

そうできれば、地域の安全をめぐる、すでにある程度わかっている人も、まだわかっていなかった人も、双方ともに発見することがあり、互いの考え方が深まり、そして双方の間の距離は縮まっていくに違いない。発災時、復旧時の行動をめぐる、「わたしにはこれができる」、「わたしにはこれが無理」といったやりとりを通し、地域の仲間としての相互のありかたを再認識する機会も出てくるだろう。

4. 今後に向けて

作成作業を続けるうちに、新たに作成した災害の部分をこれまでの＜「やさしい日本語」でつながるコミュニケーション・シート＞の増補として位置づけることの是非が議論となった。災害という非日常であっても日常の中で語る題材の一つだということは確かなのだが、実際に使ってもらうことを想定した際、災害の部分を増補「ユニット6」として追加するのでは、使い手に気づかれにくいことが懸念される。

そもそもインターネット経由の配布であるから、検索にかかることも重要である。存在をより強くアピールするためには「災害」を表に出すほうがよい。今回は水害を扱うことになったが、今後、津波や火山噴火等、別種の災害をテーマに追加することも考えられる。イラストの分量的にも当初の予想を大きく越えたことで、新たに作成した部分だけで独立させても大丈夫だということで、意見の一致を見た。よって、＜「やさしい日本語」でつながるコミュニケーション・シート 災害編＞として公開することに決定した。

新型コロナウイルス感染症予防のために、予定より遅れてはいるが、令和2年度にも引き続き「日本語ボランティアのためのコミュニケーション・シート」講座を開講し、夏秋の災害シーズンに備えて、新しく作成したコミュニケーション・シートの活用を図っていく予定である。地域日本語教室をはじめとして、多様な場、多様な機会に、大雨やそれに続く水害の危険に関して、それぞれの地域課題を共有していくことは、とりもなおさず、お互いの地域住民としての一体感を強化することであり、それはそのまま災害時の助け合いのつながりに転じていくことが可能だと考える。

多くの外国人から、日本での常識や地域のことがよくわからないという声を聞く。行政も彼らを「災害時要援護者」と位置付けている。だが、日頃から地域の外国人と接し、彼らの持っている多様な能力を知っている日本人住民、たとえば日本語ボランティアが、彼らと対話を重ねることを通して、ともに力を合わせて取り組めば、さまざまな緊急時の課題に関して、新たな視点から、地域全体のためになる対処のヒントが出てきたりするのではないだろうか。被害を受け止める姿勢といった心理的な部分でも思いがけない発見があるかもしれない。さまざまな人が暮らす地域であればあるほど、多様性の持つ力が潜んでいるはずだ。それを引き出すために、日常的に対話を重ねていくことが大変重要だと考えている。

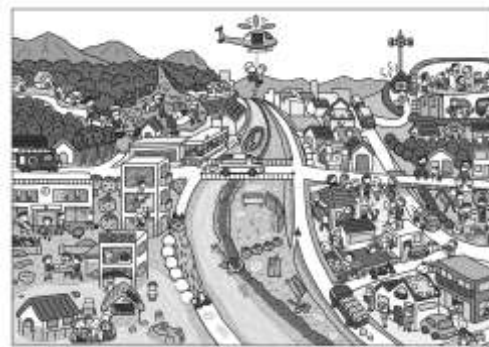
＜「やさしい日本語」でつながるコミュニケーション・シート 災害編＞の公開にあたっては、前回同様、MLやSNSを利用し、これまでのコミュニケーション・シートを使ってくださっているかたがたにご案内するだけでなく、新たに自治体の防災部局や地域の防災や安全に関わる市民活動をしている団体などにも活用を呼び掛けていくつもりである。対話の相手は外国人だけではない。地域に暮らす多くの人々にもぜひお試しいただきたいと考えている。

以上をもって、コミュニケーション・シート開発をめぐる令和元年度の活動の報告に代えたい。最後に本シート2枚を縮小掲出しておく。本稿を目にされるころには間違いなくインターネット上で公開されているので、是非そちらをご覧ください¹³。

(大雨一命を守る)



(大雨一生活を取り戻す)



¹ 坂内泰子、小島佳子(令和元年12月まで)、工藤昭子(令和2年2月から)、村上まさみ、田中美穂子の5名が所属。

² 元号の表記には初出の際、西暦を付した。

³ 本稿で「外国人」という語を用いる場合、外国で生まれた等の理由で、日本語を母語とせず、現在も日本語を用いたコミュニケーションに不自由を感じている人を便宜的に指している。その中には日本国籍の人も含まれる。

⁴ 平成30年7月の西日本豪雨(平成30年7月豪雨)について

https://www.data.jma.go.jp/obd/stats/data/bosai/report/2018/20180713/jyun_sokuji20180628-0708.pdf

⁵ (公財)東広島市教育文化振興事業団コミュニケーション・コーナー Facebook ページ

<https://www.facebook.com/hhface.communicationcorner/>

⁶ 1995年1月の阪神大震災をきっかけに、自治体等でも災害時の外国人住民の支援が課題となって多言語化が行われる場合が増えた。

⁷ 中小企業白書(2019年版)

https://www.chusho.meti.go.jp/pamflet/hakusyo/2019/PDF/2019_pdf_mokujityuu.htm

当該記述

https://www.chusho.meti.go.jp/pamflet/hakusyo/2019/2019/html/b3_2_1_2.html

⁸ (一財)国土技術研究センター「国土を知る／意外と知らない日本の国土」

<http://www.jice.or.jp/knowledge/japan/commentary10>

⁹ 平成 27 年9月の関東東北豪雨(台風 18 号等による大雨)について

https://www.jma.go.jp/jma/kishou/books/saigaiji/saigaiji_2015/saigaiji_201501.pdf

<http://www.clair.or.jp/tabunka/portal/reading/col-iwamoto.html>

¹⁰ 令和元年 10 月の東日本台風(台風 19 号)について

<https://www.data.jma.go.jp/obd/stats/data/bosai/report/2019/20191012/20191012.html>

(上記サイトはいずれも令和2年7月 3 日閲覧)

¹¹ 本稿脱稿直後に、令和2年7月豪雨が発生し、改めて水害への対応が重要であることを痛感させられた。

¹² ここで「これまでも地域の災害を経験したり見聞きしてきたりした人」と「まだあまりその地域に慣れていない人」という、若干わかりにくい表現をしたのは、常に日本人が教え、外国人が学ぶという日本語教室においてありがちな非対称的な固定観念に異議を唱えたいという思いと、日本語の能力とは関係なく、安全啓発のために日本語教室の外でも活用してほしいという思いを込めてのことである。その後の「地域での生活常識に精通している人」と「あまりその地域での生活に慣れていない人」という対比も同様の理由である。

¹³ 国際言語文化アカデミア ホームページ

<http://www.pref.kanagawa.jp/docs/ns2/index.html>